

◎巻頭インタビュー

# 環境の時代と これからの川づくり

河川工科大学大学院教授  
橋爪大三郎

21世紀を目の前にして、川を利用して生活を豊かにしてきた私たちは、今、川を大事にすることが真剣に求められる時代を迎えています。そのために考えなければならないことを中心に、川と人間の関係の過去、現在と、これからの、社会学者の橋爪先生にお聞きしました。

## 川に恵まれている日本

昨年(1998年)、一昨年と続けてシルクロード、ゴビ砂漠さらにウズベキスタンを旅する機会がありました。そういう地域と比較すると、日本はいたるところに川がある実に恵まれた国だということが分かります。あちらは、夏の気温が45℃にもなり日射が厳しいところですから、水の蒸発量が多い。水があるのが奇跡的というような地域ですから、川など滅多にないわけです。そこで、昔から人々は山岳地帯の万年雪が融けて流れ出した水を、カレーズと呼ばれるトンネルをつくって、オアシスに引いてくるわけです。そこには緑がはえ、人間も生活できるようになります。生存のためには、人間が自分の手で飲料水や灌漑用水をつくり出さなければなりません。その意味で、水や川との関わりが切実だといえます。

もうひとつ、日本の恵まれているところは、平地が少なく山が多いことです。そのため、日本の面積の67%は森林です。外国の場合、土地はもう少し平らですから、いろいろ使い途があって人の手が加わります。例えば、イギリスの森林面積は10%ぐらい。日本にくらべて、利用すべきところはほぼ利用つくされていくといえます。一方、日本は傾斜地が多く使い途がないので山のまま放って置かれたので、森林が67%も残ったわけです。ですから、川もきれいです。流れる水も多い。産業化が進んでいくと、川が汚染されドブようになってしまうのは、どこの国でも見られることですが、工業化の割には川の汚染が目立たないのは、ひとつには日本が森林に恵まれているからです。



## 川の恵みを忘れた日本人

川や水に恵まれている日本人は自然に親しむことの多い国民のはずでしたが、最近では川や海で泳ぐ光景を見なくなりました。泳ぐのは、もっぱらプール。そんなふうには自然の水との関係が疎遠になったことの象徴が、東京ディズニーランドではないでしょうか。海の近くにあるのに、まったく閉ざされた空間で、浦安にあるのかロサンゼルスにあるのか分からない。内部には川や滝や山があるけれど、全部まがいもので、人工のものしか楽しめないようになっていて、それが人々に喜ばれている。

自然環境の基本は水循環。川は自然環境の中心といえます。川を大事にすることに結びつきます。

都市の中から自然の水が失われ、人工につくられた流ればかりのような環境で生活していれば、もう一度自然の水に親しもうといっても、人工の水に慣れた目には、本当の浦安の海岸よりも、自然をまねてつくられた人工のものの方が親しめるものに映ってしまうでしょう。

どうも、最近の日本人は、川や水に恵まれているその恵みが、よく分かっていないようです。近頃、都市の中小河川にいろいろ手を加えた例が見られます。そうすることで、もう一度自然に目を向けさせることも大切です。でも、それを本当の自然と勘違いしてはいけません。むしろ、農業用水や工業用水、発電にも使われない小さな川、名もない川、役に立たない川を、現状のまま大事なものとして保全していくことが大切だと思います。

## 川は自然環境の中心

川は自然環境の中心です。というのは、自然環境の基本に水循環があるからです。

海から水が蒸発して雨になり、そして川になって流れてまた海に戻る。ですから、川はとても大切なものなのです。環境を大事にするということは、川を大事にすることに結びつきます。それも、なるべくもともとあった形にしておくことが基本だと思います。ただ、川は人間の生活と密接に結びついてきました。人間は飲み水やいろいろな用途に川の水を利用してきたわけです。平地にはたくさん人間が集まってきましたが、なかでも、平地を流れている川のそばは人間にとって便利な場所なのです。しかし、自然のままではときどき氾濫したりします。使い勝手が悪かったり、不都合なこともあるので、人間は川に手を加えてきたのです。それがほどほどであれば、川と人間の調和した関係ということになるのですが、特に産業化が進んで工業に水を使うようになってから、手を加えすぎた面があります。こういうことに対する反省から、今、環境や川を大事にする声が高まっているわけです。

## 産業の規模が自然の許容量を超えた

農業用水から工業用水へ、川の水の利用形態が大きく変化したのは産業革命以降のことです。ただ、当初は産業革命とか近代化といっても、規模が小さかった。人間の活動の結果、

自然が破壊されるとか地球がおかしくなるといふ事態にはいたらなかったのです。例を挙げると、当初、製鉄には石炭でなく木材を使っていました。例えばスウェーデンがそう。スウェーデンではこれ以上伐採できないところまで木を切ってしまう、製鉄業が衰退したのです。船でいえば、木造船の時代、オランダは造船に適した木を切り尽くす結果となりました。産業革命の当初でも、国を挙げて産業化に取り組めば森林は消滅し、川も当然ダメージを受けたはず。ヨーロッパでは実際そういう事態が起きたのですが、それでも規模は小さかった。産業の移転が行われれば、ヨーロッパ全体では何とかなんとかなったし、地球規模で見れば、ほかの大陸・地域が近代以前ということで豊かな自然が残っていました。

ただ、これは18世紀から19世紀にかけての話です。今、20世紀も終わろうとしているとき、桁外れの事態が進行しているのです。ヨーロッパから遠い日本が世界第2の経済大国になり、アメリカでは産業が飛躍的に発展しました。先進工業国に工業原材料を輸出するため、オーストラリア、ブラジルなど世界中の国々で資源が掘り出されています。その結果、気候変動など地球環境にさまざまな異常が起こっているわけです。地球にくらべて産業の規模が大きくなりすぎたといえます。

## 「持続可能な発展」という考え方

今、明らかになってきたことは、自然を利用すればするほど利用すべき自然が破壊され、もうこれ以上利用できなくなって、自分で自分の首を絞めるような関係が生まれてきたということです。だからといって、自然を利用することをやめるわけにはいきません。それでは今後も利用し続けるためには？ その答えとして、人類が自身の行動に制限を加える必要がある、ということが10年くらい前から明確に意識され始めたのです。「持続可能な発展」と呼ばれる考えが出てきたわけです。その意味するところは、自然を有効に利用すること、自然を将来の世代のために残しておくこと、地球を守るということと両立させないといけません。ただ、口でいうのは簡単ですが、実際にどうするのか、その決め手はまだありません。CO<sub>2</sub>の排出規制の問題ひとつにしても、総論賛成、各論反対。先進国が抑えるべきだ、いや発展途上国が抑えるべきだと責任を相手に押しつけ合って、結論が出

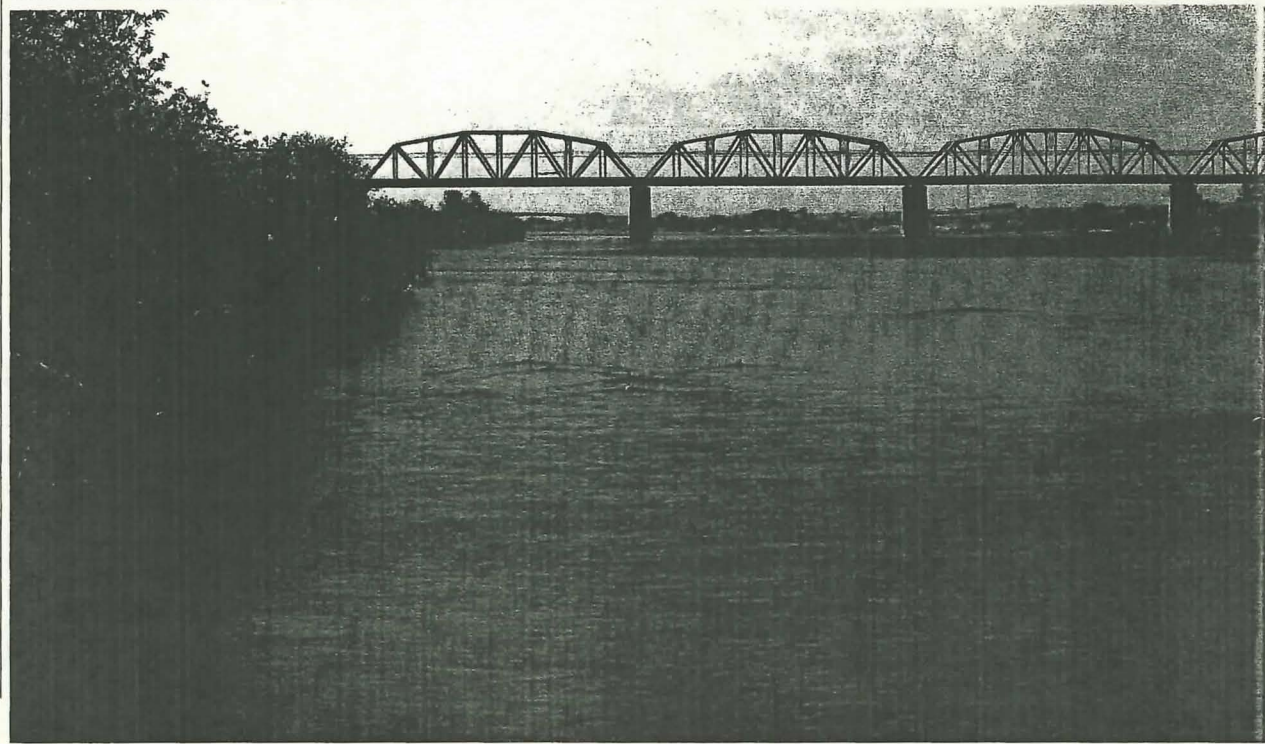
ないのが実情です。このまま、先進国も途上国も今まで通りの行動が進むのであれば、環境はとりかえしようもなく破壊されてしまう、と私は危惧しています。

川や水についても、同じことがいえるのではないのでしょうか。世界の大河と呼ばれる川は外国にあるのですが、広大な流域を潤してきたその川がみんなおかしくなっています。異常気象、人口増加、近代化など理由はさまざまですが、中国の黄河下流域が200kmにわたって干上がっているといいます。長江では水質汚染が悪化し、大洪水が発生しました。ガンジス川でも氾濫が相次いでいます。どの川も満身創痍という状態です。

### 川だけを取り出さない視点

さきほど、川は自然環境の中心といたしましたが、今後、ますます大きな問題になっていくのは環境の問題です。川に対しては、人間のために水を役立てたいという当然の要求と、そのことばかり考えていると自然が破壊されて元も子もなくなってしまうから考え直そうという矛盾した要求が現在あります。私自身は、水も川も自然もあるがままがいちばんいい、という観点も大切だと思っています。ですから、川の利用や管理にあたっては、この観点もうまく折り込んで欲しいと期待しています。

●関東平野を流れ、流域の農地を潤し、東京都民に飲料水を供給する利根川。関東の産業、生活は利根川の水の利用抜きには考えられない(栗橋付近)



これは日本に限ったことではありませんが、自然は連続しているのに、川や林、空ごとに役所の管轄が別々でバラバラに管理されています。これは仕方ない面もありますが、行きすぎると良くない。川だけを取り出して大事にするのではなく、山や平野、海、空があって、つまり自然があって初めて川があるのですから、川がおかれている自然そのものを大事にしていくべきでしょう。ですから、河川行政と林野行政などさまざまな行政が連携して欲しいわけですね。もともと川の水は、空から降ったあと草木に溜められて流れ出てきたものです。木がなくなると、大雨のとき一度に水量が増えてしまったりと、川と森林は密接な関係があります。そこを充分配慮すれば、より自然にマッチした行政になると思います。川だけを取り出すという発想は、川を役立てたいという視点です。川をそれ以外のものと切り離さないで大事にするというのが、本当に川を大事にする途ではないですか。

### 利用すること、そのままにしておくこと

現在は、川を利用するということと、川をそのままにしておくということ、そのどちらも人間の利益になるということが意識され始めています。ですから、これからの川づくりではその両方を意識するという姿勢が望まれます。行政には、行政の目的を市民に分かりやすくはっきり説明することを望みます。市



●東京の住宅地を流れる小さな川、落合川。自然が良く残されたこの川は子供たちの遊び場として人気が高い

川を利用すること、川をそのままにしておくこと。どちらも人間の利益になるのですから、これからの川づくりではその両方が望まれます。

民に歩み寄ることも必要です。一方、市民は受け身であってはいけません。自分たちのそばを流れる川がどうあるべきか、そのためにはどうすべきかを考え、自らがアクションを起こさなくてはなりません。

現在、川を大事にして自然に親しもうというところで、コンクリートの護岸をはがして元の川に戻そうという試みが行われています。こうした方向は正しいといえます。川を利用しようとするばかり考えていた発想から変化したわけです。というのも、利用しているうちに川が破壊され始め、洪水が起こったりするようになった。そこで、コンクリート護岸で川をガチガチにしたところ、面白味のない川になってしまったので、市民から愛想をつかさされ、行政も考え直し、自然護岸につくり替えているわけです。それなら、なぜ、最初からそうできない？と思われるかもしれませんが、最初からそれが分かるほど人間は賢くない。5年後、20年後に考え方を考えるわけです。こういう変化があるわけですから、理想をいえば、30年、50年、100年後の状態を考えて川づくりをして欲しいと思います。川のそばで生活している人々、川とともに生きている人たちと一緒に、そういう川づくりをしていくことが大切です。

### 「実験的」川づくりの提案

ひとつ提案があります。現在、過疎化がいろいろ騒がれ大きな問題になっていますが、ある地域を決めてそこから「総撤退」してみても……と思っています。ある水系のここからこ

こまで、面積でいえばひとつの郡くらいでいいと思うのですが、実験としてその地域には一切手をかけるのをやめてしまう。緊急時のために道路は残しておきますが、ほかは一切手をかけないで、水田の畝は崩れるにまかせ、神社は朽ち果てるにまかせます。ほかの道路もアスファルトを突き破って雑草がはえるのにまかせます。その状態で、50年くらい放っておきます。50年たつと松がはえ、さらに数十年たつと万葉の昔さながらの景観に戻ることでしょう。そこでどんな川が出現するか？

「万葉集」そのものの川に戻っていくのではないのでしょうか。クマやシカが生息して、吉野熊野国立公園や屋久島に残っているような景観が現れるのでは、と想像しています。きっと、周りは照葉樹林になってくるでしょう。秋の紅葉など見事だと思います。これからは、傾斜地に水田や畑を営むのは無理でしょう。ですから、全部とはもちろんいいませんが、場所を決めてひとつ実験してみてもいいと思います。広い面積では難しいのであれば、沢とかを10カ所くらいでもいいと思います。ダムの上流の廃村になったようなところでもいいかもしれません。これは川づくりでも、「何もしない川づくり」になりますか。

幹線道路は残しますから、廃屋があればそこを少し整備して林間学校みたいなものをつくる。無人島のような状態の林間学校ですから、すごいですよ。そうした状態に積極的に意味を与えていくわけです。日本ではそういうところはそこにしかないとなれば、ものめずらしくて、みんな出かけて行くでしょう。尾瀬のように自然の中に立ち入ることは禁止したうえで、観光も許可する。そうすれば、周りに民宿ができたりして、過疎だったところが過疎を材料にして開発できます。開発と保存の両立とは、例えば、こういうことではないでしょうか。(談)



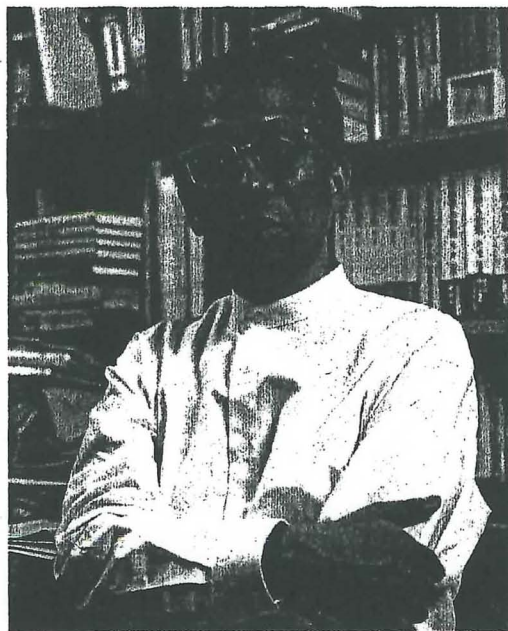
### ●プロフィール

橋爪大三郎・はしづめだいさぶろう  
東京工業大学大学院社会理工学研究科教授。1948年生まれ。神奈川県出身。1977年、東京大学大学院社会学研究科博士課程修了。理論社会学、宗教社会学、現代中国、現代社会論を研究する。1995年から現職。著書「はじめての構造主義」ほか多数。

私の一流品者

橋爪 大三郎  
HASHIZUME DAISABURO

いつまでも飽きのこないデザインのもの



正直言って一流品というものが一体どんなものなのかよくわかりませんが、私にとつては使い勝手がよくて長持ちするものなら何でもいいのです。  
実は私、近眼で中学2年生ぐらいのときからメガネをかけていますが、はじめはプラスチック製のフレームでした。かけ心地はどうかというと、これがなんとも具合が悪い。すぐに落ちてきたり、左右のバランスもしつくりこない。その頃はまだ日本にメタルフレームのメガネはほとんどなく、しばらくそれだけがまわっていました。大学3年生ぐらいのと

きメガネ屋さんに行っているいろいろな物色していると、ぴったりにくるのがあったのです。ドイツのマルヴィッツがそれ。値段は高かったけれど、貯金をはたいて思いきって買いました。以来いまだに愛用しています。なにしろ丈夫で、このタイプのメガネフレームはいま、売っていないかもしれませんね。いったいどういう合金がよくわかりませんが、とにかく丈夫で重い。フレームと鼻を繋いでいる部分が相当に分厚くて、ここをうまくひねり、角度をつけて調節し、かける人の顔に合わせている。また、鼻に引っかかるところもうまく

できています。

大学生の頃だから、サッカーボールを顔面に何回も受けたらしてひしゃげたり、落っこしたりもしましたが、いまも使っています。プラスチックや他の材質のフレームなら、もうとっくの昔に壊れてしまっていたでしょうね。少しぐらいひしゃげても、タオルで巻いてペンチで整形すれば、すぐ元通りになる。もちろんメガネ屋さんに行き、修理してもらったことも何回かあります。三十年以上かけているから決して新品には見えないけれど、これといって特別、不都合な点はありません。これからはずっと、おそらく一生使えると思いますから、結局は安い買い物だったことになりました。機能のよさはいうまでもありませんが、デザイン面も無視できません。いくら最新のデザインだからといっても、使っているうちに飽きがくるようなものだったらしょうがないですからね。

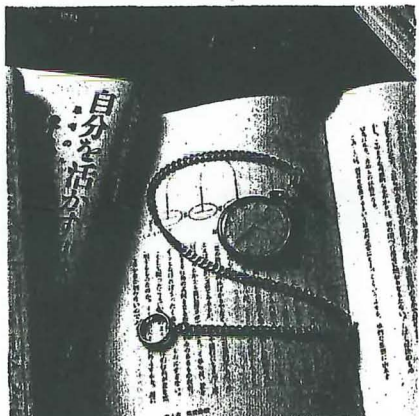
もうひとつ、いつも身につけているものがアルバの懐中時計です。はじめて自分の時計を持ったのは、父からお下がりの腕時計。どういわけか私は右利きなのに右腕に腕時計をはめる癖があつて、あるとき剣道か何かをしているときに左手を受け壊してしまつた。それで使いはじめたのが懐中時計。家にあつた戦前のものなので手巻き式。1日に1回巻かないと動かないので、これがなかなか面倒くさくてかなわない。そのうち電池式のクォーツのものが出てきたので、御徒町のアメ横に行つて買ったのがこれです。小さくて薄いところが気に入っています。

私の仕事は授業をしたり、講演をすることが多いので、決められた時間の範囲で話さなければなりません。話しながら、あと何分と計算する必要があります。誰でもそうだと思いますが、途中で腕時計などちらちら見ているのがわかつたら、相手は決していい気持ちがありませんよね。その点、懐中時計なら問題なし。文字盤が大きくて、秒針までつき

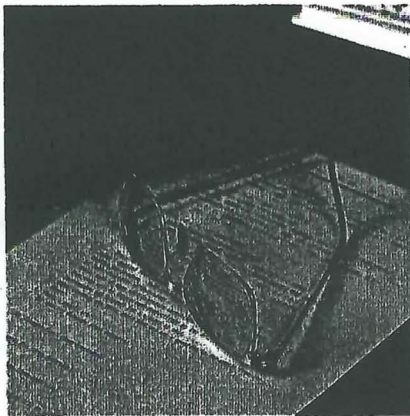
りとわかるし、机の上に置いてあるので時間を見ているのが気づかれにくいのです。

メガネや時計はいわばローテクというが、昔のものでも大切に使いばすつと使える。反対にワープロなどハイテク製品はダメですね。1985年に富士通のMYOASYS2を当時のお金で40万円はたいて買いました。親指シフトのキーボードですが、フライインドタッチで打てるようになってから文章はずつとこれで、合計して今までに11台使っています。ワープロのようなものは時代とともに技術が進歩していくから、古いものよさというか、アンティーク的な価値は生まれませんね。(談)

東京工業大学教授 同大学院社会理工学研究所価値システム専攻 構造主義をもとに現代社会の動きをわかりやすく説く社会学者、著者に「はじめての構造主義」「冒険としての社会科学」「性愛論」など。



アメ横で買ったクォーツのアルバ製懐中時計。文字盤が大きく見やすいので、授業や講演会でいつも使っている必需品のひとつ。



原稿書きには欠かせない富士通の親指シフトワープロと、長年愛用しているマルヴィッツのメガネフレーム。デザインがすばらしい。